

20 外国人とフラメンコ

日本人のフラメンコ関係者の中には「フラメンコはスペインのもの。私たちは外国人だから」と言う人がいます。確かにフラメンコはスペイン、アンダルシアで生まれたアートです。でも、実は外国人とフラメンコは切っても切れない関係なのです。それはフラメンコの店、タブラオがいつも外国人観光客でいっぱいだから、ということだけではありません。でも実はそれがキーポイントでもあるのです。

フラメンコの始まりから

フラメンコが、フラメンコという、舞踊、音楽を含む一つのアートとして成立するためには外国人の存在が必要不可欠でした。もともと、アンダルシアのヒターノたちなど民衆の間で楽しまれていた歌や踊りが評判をよび、それを観るためにお金を払う人が出てきました。歌や踊りでお金を稼げるようになり、職業として専念できる人がで

てきたことで、フラメンコは発展を遂げてきました。お金を払って観る人たちは当初、地元スペインのお金持ちや外国からの旅行者が主でした。最初は彼らを自分の家や滞在先に招いたり、彼らの宴に出かけていくなどしていたのが、19世紀の中頃からはアカデミア・デ・バイレ、舞踊教室とよばれる場所でのショーが始まり、ここにも多くの外国人が訪れました。その流れをくみ、始まったのが、カフェ・カンタンテというフラメンコを見せる店です。ここでは地元客も多かったようですが、外国人も多く訪れています。

現在、フラメンコの生まれ故郷のアンダルシアだけでなく、マドリードやバルセロナなど都市部などにもあるフラメンコのライブを見せる店タブラオは、現代でも主な観客は外国からの観光客ですが、実はこの傾向は今に始まったことではなく、フラメンコの歴史の始まりからだったのです。

また、フラメンコたちは早くから外

国公演に出かけています。例えば、マラガ生まれのトリニダ“ラ・クエンカ”は1880年、23歳でパリで公演。その後、ニューヨークやメキシコでも大評判を取りました。フラメンコ誕生以前にも、ボレロの踊り手たちがすでにパリやロンドンで公演をし、評判をとっていたことも背景にあるのでしょうか。

外国出身のアルティスタたち

ルイシージョ、ルセロ・テナ、ホセ・グレコ……。フラメンコ舞踊の歴史をかじった人なら誰もが知っているこのアルティスタたちが実は全てスペイン人ではないって知っていましたか？ カルメン・アマジャに見出されたルイシージョとルセロ・テナはメキシコ人。アルヘンティニータに見出されたホセ・グレコはイタリア系アメリカ人。またスペイン国立バレエの名作『メデア』を振り付けたホセ・グラネーロはアルゼンチン人です。現在、マルコ・



Academia de Baile, en Sevilla ギュスターヴ・ドレ。19世紀中頃、外国人に踊りを見せるセビージャのフラメンコ教室。



ロベルト・ヒメネスとマノロ・バルガス／1955年フラメンコ舞踊団公演プログラムから。1955年史上初の舞踊団が来日しましたが、そのスター格の二人はメキシコ出身でピラール・ロベス舞踊団などで活躍した二人でした。

バルガスとのペアで活躍中のクロエ・ブルーレはカナダ人ですし、アンダルシア舞踊団にはチリ出身のフロレンシア・オリヤンがいました。スペイン国立バレエ団にはスペイン育ちの韓国人、ソウジュン・ユウンもいます。舞踊では70年前から国籍を問わず活躍していますし、ギターでも、フェルナンダやアグヘータスと共演したブラオにも長く出演していたダビ・セルバはアメリカ人です。現在ではオランダ出身のティノ・パン・デル・スマンもいます。

なお、スペインは日本と違い、二重国籍を認めていることもあり、スペイン国籍を持っている人がほとんどであることも付け加えておきましょう。

外国人なしにフラメンコはない

タブラオや公演先だけではなく、教室でも外国人の存在は大きく、セビー

ヤの踊り手が教えるクラスで外国人がいらないところはまずありません。子供むけの教室や公立舞踊学院、コンセルバトリオでこそ外国人は少数派ですが、アーティストの生活基盤の一つでもある教室も外国人なしには成り立ちません。夏などのクルシージョなら尚更です。外国人なしにはフラメンコは現在の繁栄を迎えられなかったでしょう。

引け目を感じる必要はない

外国の文化を愛すること、やることに引け目を感じる必要はありません。そこに敬意と愛があれば、文化の盗用と見做されることもないでしょう。2010年にフラメンコはユネスコの無形文化遺産となりました。無形文化遺産のことをスペイン語でPatrimonio Cultural Inmaterial de la Humanidadと言います。直訳すれば、人類の無形文化遺産。スペイン由来でも、ス

人だけのものではなく、みんなのもの、という考えだとはうがちすぎでしょうか。

2018年『フラメンコナウタ』ではスペイン、ブラジル、日本、オランダ、フランス、台湾、ロシアなど、様々な国のフラメンコたちが出演しました。フラメンコはもうスペインの専売特許ではないのではないのでしょうか。



2003年のシカゼ
ヘレスのフェスティバルでは公演後、毎夜遊び歩いていました。いいフィエスタもいっぱいありました。トタとバル、アリアテで。

志風泰子／1987年よりスペイン在住。セビージャ大学フラメンコ学博士課程前期終了。パセオ通信員、通訳コーディネーターとして活躍。パコ・デルシアをはじめ、多くのフラメンコ公演に携わる。

Flamenconauta 2018年Festival de Jerez

歌い踊る今枝友加にパルマを打つのはロシア人。スペイン、フランス、オランダ、ブラジル、チリ、メキシコ、台湾、日本と多国籍なフラメンコたちが集まった公演は高く評価されました。



©Kyoko Shikaze